長洲町立長洲小学校　校長便り　No.66

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和5年1月27日(金)

学校の大切な役割「社会性の育成」①

さて、現行学習指導要領は、子供たちが未来社会を切り拓くために「何ができるようになるか」を目指すものへと変化しました。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現のため「どのように学ぶか」を強く求めています。本校では「主体的・対話的で深い学び」を「主体的・協働的で、深い学び」と捉え、他者との協働的な学び合いを前面に押し出した学習活動を展開しています。

このような授業改革や協働学活動の展開によって、我々は今後の学校の在るべき姿を目指して日々歩みを進めているところですが、在るべき学校の姿は授業だけではありません。学校が担う役割は学力充実だけではなく、「ルールの重要性」「思い出づくり」「社会性を育む」等々、数え上げればきりがありません。今日は、この3点目に挙げた「社会性を育む」ことについて述べてみたいと思います。

私はこれまで高学年担任が多く、その中でも6年生の担任が最も多かったです。これは6年生への飛び込みの担任が多かったことを意味しています。私はこの経験により、担任としての仕事、パフォーマンスについての評価は、1年のスパンで行うようにしました。その結果、私は1年間全力投球の癖がつき、良い事尽くめでした。他の先生からは「折角1年間向き合って、子供達との関係も良好だから、2年間受け持ちたい。」という理由も聞かれましたが、それは教師側の理由です。私も持ち上がりの担任の経験もしましたが、逆に子供達の立場からは別の教師との出会いが与えられなかったという見方もできます。更に、「クラス替え」ということも考えてみましょう。小さな学校ではクラス替えは無く、6年間、固定された人間関係のままで卒業を迎えることも多く、多くの同級生との中で育まれる社会性の発達にも、少なからず影響が出ます。大きな学校では、今では「毎年クラス替え」というシステムが主流になっていますね。私は、飛び入り担任が多かったせいか、毎年クラス替えの方が子供達にも教師にも良いような気がしています。社会性の発達という視点から考えると、多くの人と出会い、その中でどんな人とでも「上手くやっていく」ということを学ぶような気がします。私は、1年しか担任できなかった多くの子供達や保護者と、今でも密な付き合いをしています。

卒業前雑感　～中学校とは⑤～「欲求制御力」を身に付ける

家庭でもよくある場面の話です。テレビをだらだら見ている、あるいはゲームをしている子供に、「勉強はしたっけ？　はよしなんね！」と言うと子供は「今しようと思ったのになぁ、あ～ぁ、やる気なくした…。」と屁理屈をこねる。保護者の皆様にもこのような経験がある方もいらっしゃると思います。

さて、冒頭「欲求制御力」とは、要するに「我慢すること」です。「時間を制御する能力」と言ってもいいでしょう。中学生になれば「ゲームしたいけど、今は我慢して勉強しよう。」というように、我慢が必要なときは自らの意志でしなければなりません。例えば、定期試験の数日前には部活動等も中断され、普段より早めに帰宅できるようになります。この時、「よし、やるぞ！」と考える子供と、「少しくらい、いいか。」とゲームをする子供とでは、成績に差がつくのは明白です。私の場合は後者に近かったので苦労しました。一夜漬けの知識は殆ど定着しません。小学生のうちに一日の時間の管理を任せたりすることは大変有効です。卒業までの時間を利用して、子供達に積極的な時間管理をさせてみるのもおもしろいですね。

6年生では、卒業までのカウントダウンも始まっている様子。残り少ない小学校生活の中で中学への準備をしておくと、中学生活への慣れもスムーズだと思いますよ。有意義な時間を作って欲しいものです。

シリーズ「自分を語る」#66

平成16年の11月頃だったでしょうか、学童オリンピックの団体戦に出ることになりました。男子はもともと人数も少なかったので大会そのものに出られるかどうかというところでしたが、学年混合でチームを作り、正に「参加することに意義がある！」状態で出場しました。それに反し、女子チームは粒ぞろいといいますか、学童オリンピック個人戦で全員がベスト8に残りそうな勢いでしたから、「ひょっとすると優勝狙えるかも！？」なんて思いながら大会に出場しました。

案の定、男子は1回戦負けでした。仕方ないと言えば仕方ないですけど、子供達は楽しそうにプレーし、その後女子チームを応援しました。女子チームは順調に勝ち進み、ベスト8まで来ました。子供達とは「談交じりにこんな話をしていました。

「勝ったらベスト4だけん。決勝に出られんでも3位決定戦があるけん、優勝チームと同じ回数試合ができるということタイ。」

まさかこれが本当のことになるとは…。実際、準々決勝はストレートで快勝でした。「ベスト4」この響きに酔いしれましたねぇ、この時ばかりは。学童オリンピックは当時の大会の最高峰だったと思います。しかも団体戦です。個人のスキルだけではなく、全体のスキルや心の繋がり、信頼関係が試される大会といってもいいかもしれません。その大会でベスト4ですから。

いよいよ準決勝です。相手は県南の強豪です。メンバーの中に個人戦で優勝した選手がいました。この選手には負けるということを前提にせざるを得ません。しかしシングルスとダブルスに勝てば良いのですから、どちらかというとこちらに分がありそうでした。そこにスキが生じたのかもしれません。

ちょっと、当時の熊日学童オリンピック団体戦について覚えている範囲でシステムを紹介しますね。第1シングルス、第2シングルス、ダブルスの3試合で雌雄を決します。3試合のうち2試合を取った方が勝ちです。ということは、2人ないし3人、スキルが高い選手がいれば勝つことができるのです。当時のメンバーは5・6人スキルが高かったので、補員も充実していました。私の心の中に「多分勝てる。」という慢心があったと、今になれば思います。また、対戦オーダー表は直前に提出するというシステムでしたから、組み合わせによっては負ける可能性も十分にあった訳です。そういう「欲」だとか「邪」な考えには、いい結果はついてきませんよね。気もそぞろの私の意識は、当日の子供達の体調や精神的な状態まで、しっかりと把握することができていませんでした。実はこれがとても大切なことなのです。そのような状況の中で試合開始です…、結果は如何に！？　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）